

花の友

長唄 全詞章

原典に「杵屋三五郎述」とあるのみ

作詞者・初演年不詳

〔本調子〕 下総や武蔵の合のひと流、心も隅田の川上に、寄するは春の友なれや

尽きぬ眺の花の香を、茶壺につめし初昔、変らぬ色のいさほしに、飽かぬあそびの流し点て
立てし誓の行末は、その姥口のふとん釜、ふたりしつぽり嬉しい中を、誰が水さして替服紗
捌きかねたるなかなかに、思ひのたけの竹台子、その折据の末までも、月と花との戯れに、
すぐるすさびの面白や

見渡せば流れにうかむ一葉の、中の小唄の顔見たや、桜がものを言ふならば、さぞや悵氣の
種である、粹な隅田の水鏡、焦がれあふたる舟のうち

余所の詠むめのもどかしや

〔二上り〕 君をまつ香の薫の床しき

恋の闇路の色ふかく、染むる柳の瀬にうつる

風の姿のいとしさに、いつか誠をあかしてそして、約束かたき女夫石、はたで見る目の
たの
樂しきよ

花のかずかず数ふれば、松は臈に桜はゆかし、粹な山吹桃椿、藤妍に風も長閑けし